生きる。

がんと共存 克明に記録

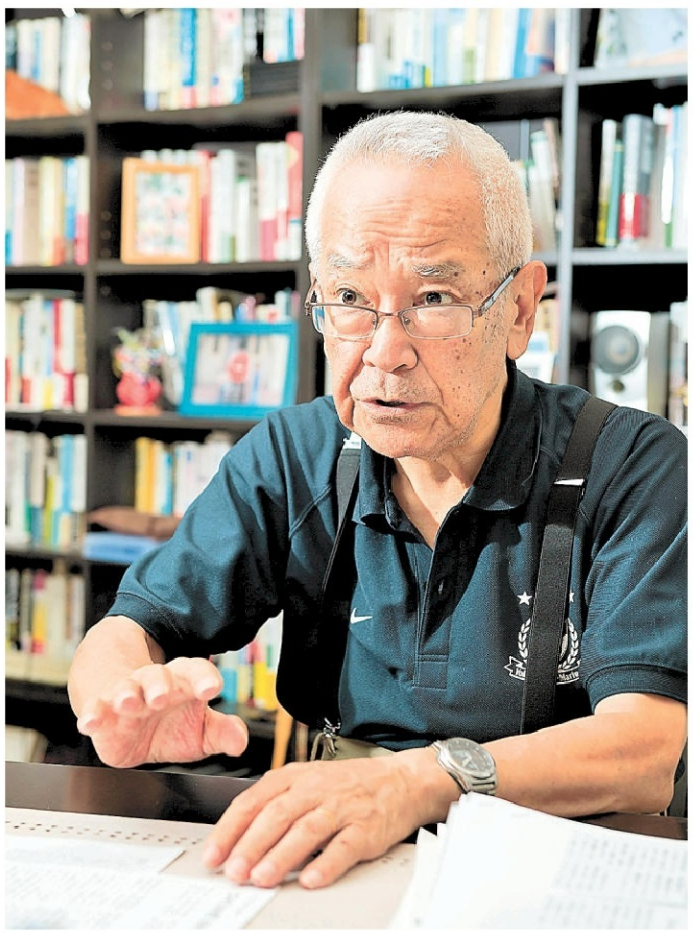
元日大国際関係学部特任教授のジャーナリスト北岡和義さん（76）＝神奈川県茅ケ崎市＝はステージ4の肝臓がんと診断された2017年12月9日からブログ「ガンと生きる―北岡和義残命録」を立ち上げ、治療経過や交友関係、がん論などを克明に記録している。死を意識した国際派ジャーナリストが見たがんとは、人間とは―。

◇

みんな心配してくれるんだけど、友人の一人が真面目な顔で「北さん、やり残したことないか？」って聞くわけ。「お前こそどうなんだ。明日死ぬのはお前かもしれんぞ」って言ってやったら「そりゃそうだよな」って。みんな自分は死なないと思ってるんだな。でも死は誰の背中にも張り付いているんですよ。健康体だろうが、がん患者だろうが、死ぬまで一生懸命生きることが大事ってのは変わらない。僕はそれをがんになって実感した。痛切に感じるね。それをブログで伝えたいと思った。

「ガンと生きる」って、自己矛盾みたいだけど「死と生きる」ってこと。死は何十年か先にあってそこに少しずつ向かっていくとみんな思ってる。僕も思ってた。実際は死のほうから突然どーんと来るわけ。死を意識するとものすごいリアリティーを持って、大事に生きようとか、殺し合いはやめようって思える。死に対するリアリティーが人類にあれば世界は平和に向かうと思うよ。医者なんか毎日死を見てるから、必死に患者を治そうとする。すてきだよね。新聞記者は誰々が亡くなったって記事を書くけど、現実感ないでしょう。それが悪いわけじゃなくて、少しでも分かろうとすることが大事だと思う。

当事者だから分かることは多いよね。マイノリティー問題が



ジャーナリスト 北岡和義さん

きたおか・かずよし 1941年、岐阜県生まれ。南山大卒。新聞記者、衆院議員秘書を経て79年渡米、ロサンゼルスで邦人向け放送局「JATV」を設立。約27年間の米国生活後、熱海市に移住し、2016年まで日大国際関係学部特任教授を務めた。09年から本紙「時評」を執筆中。ブログはホームページ（http://kitaokanet.main.jp）から。

は当事者にしか分からないんだ。だから声を上げてもらって初めて問題の本質が分かる。

少数派こそ大事

民主主義は最後は多数決だけど、大事なのは多数派ではないんです。マイノリティーの問題提起がすごく重要なんですね。それを常に意識してきたのが米国。僕は社会を進歩させるのはマイノリティーだと思ってるんです。簡単に言えば米国の民主化も黒人が進めてきたんだと。

オバマを選んだ時、全米が泣いたんだよ。ついに人種差別を乗り越えたって。たった3人の街頭演説から始めた無名の黒人青年が大物のヒラリーを撃破した。勝利演説でオバマは言うんです。「黒いアメリカ人も白いアメリカ人もいない。アメリカは一つだ」「だから我々にはできる（Yes, we can.）」って。すさまじい感動だったんです。

ところが8年たってトランプが出てきた。移民が負担だからやめようと言っている。間違ってるんですよ。米国はもともと移民が集まって立派になった国。迫害された人やノーベル賞を取るような人とかが世界中から集まってきて成り立ってるんですね。移民を受け入れる寛容さこそが米国ですよ。オバマの父親はケニア人だし、アップル社の共同設立者スティーブ・ジョブズの父親はシリア人だよ。どちらの父親も米国が受け入れた留学生だったんですよ。

僕も38歳で渡米し、受け入れてもらった。ロサンゼルスの邦字紙の編集部長を経てフリーになった。43歳のころ独立して放送局を作った。苦労したけど面白かったよ。27年住んで米国のすごさも悪いところも学んだ。米国は実際、移民の矛盾も引き受けてきて、いま限界に来ている気がするね。白人優位主義が終わろうとしている。トランプ登場は白人の危機感なんだな。

人間って面白い

がんって言われた時は、ぽかーんとした。何で俺、元気なのにって。でも知れば知るほど、がんって訳の分からんやつだなって興味が出てきた。病気というより、人間の生命活動そのものなんです。細胞が自ら死ぬアポトーシス（細胞死）って現象が生命に欠かせないことがわかってきた。ところが何らかの理由でアポトーシスが働かないと、死ぬはずの細胞がどんどん増える。それががんなの。へーって感心しちゃった。面白いよね。

ギリシアやローマの時代から哲学者は人間の本質に迫っていたわけだけど、人間をどう制御するか、どう扱うかってのは今もあまり進歩してないよね。がんもその典型。不可解だからこそ興味は尽きない。人間とそっくりなんです。どっちもよく分からないけど面白い。生きるために死ぬ細胞がある。多数派は少数派に生かされているんです。がんを知ることは人間を知ることなんだ。それを意識できたことががんになった最大の収穫かもしれない。落ち込む時もあるし、抗がん剤の副作用は厳しいけどさ。生きるって、人間って、やっぱり面白いよ。

（社会部・鈴木誠之）
（写真部・浅井貴彦）
月1回掲載します

ロス疑惑など米国で数々の事件を取材した当時の北岡和義さん

メモ 米国時代、ロス疑惑の謎に迫り「13人目の目撃者」を執筆。三浦和義氏に誌上で公開質問状を突き付けたことも。海外在住日本人の在外投票運動も訴訟原告団の副団長として先導した。比例に限られていた在外投票の違憲判決を最高裁で勝ち取り、衆院小選挙区と参院選挙区でも在外投票を可能にする2006年の公選法改正につなげた。

ひといき 北岡さんとは2009年、米国出張をきっかけに出会った。眼光鋭い権力批判の合間に、ふいに見せる優しい笑顔。人柄がうかがえるスタイルは初対面の時から印象的だった。

自身が米国でマイノリティーとして約27年過ごした。米国の偉大さとひずみ、少数派の痛みと存在意義を誰よりも知るジャーナリスト。少数派が当然の権利を勝ち取るため、敢然と権力と闘う姿を何度見てきたことだろう。

こちらの心配もつかの間。「がんってやつはなかなか面白いよ」と笑い飛ばし、険しい顔でトランプの移民排斥批判が始まる。いつもの調子に一安心。ただ、「若くてもいつ死ぬか分からんぞ」はきっと本心からの助言。後悔のないよう、一日一日を精いっぱい生きる大切さを教えてもらった。

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます